

食べるたびに、かな哀しくって…

林真理子



角川文庫

食べるたびに、^{かな}哀しくって…

はやし まり こ
林 真理子



角川文庫 6636

昭和六十二年一月二十五日 初版発行
平成五年五月二十日 二十一版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五二

営業部(〇三)三八一七—八五二二

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

食べるたびに、哀しくて…

林 真理子



角川文庫 6636

目次

1 少女期の食べ物は懐かしい

アツアツ餡あんパンリョーコちゃんのお誕生たんじょうび日

クリマンジュウ

つるや

じゃが芋畑いものコーヒー牛乳

最後のトンカツ

ママ・メイド・クッキー

笑う弁当

初恋はつこいの巻き寿司ずしカレーと煙草たばこ

七 九 一四 二〇 二七 三三 四〇 四七 五四 六〇

2 青春期の食べ物はどこか哀しい^{かな}

バターのおい

カツ丼^{どん}

アンミツ

アンミツ PART II

納豆^{なっとう}トースト

ケンタッキーフライドチキン

熊^{くま}っ子^こ鮓^{ずし}

フランスパン

クリスマスケーキ

ウマヅラ

朝食

3 そして今は……

ビュッフェ式

七七

七九

八五

九五

一〇四

一二

一三〇

一三七

一四六

一五五

一六三

一七三

一八一

一八三

フ
グ

しゃぶしゃぶ

一八九

一九三

あとかき

二〇三

解説

沢野ひとし

二〇五

本文イラスト 安西水丸

少女期の食べ物は懐かしい



アツアツ餡^{あん}パン

私の母の実家は、明治時代からの菓子屋^{かしや}だった。

代を継^ついだ従兄^{いとこ}が、すべてとり壊^{こわ}してビルを建てたが、テナントショップが四つ並^{なら}んだというのだから、かなりの広さだ。

その店に付属物のようにして、私の家はあった。母家^{おもや}の菓子屋は、いい木材をたっぷり使った広い家だが、私の家はとにかく古くて小さい。なんでも私のひい祖父^{じい}さんという人が、借金のカタに引^ひつ張^はってきた家だという。

私が幼い頃^{ころ}は、祖母と未亡人^{お婆}だった伯母^{おば}がまだ生きていて、この菓子屋はたいそう居心地のいい場所であった。

祖母からは小遣^{こづか}いを、伯母からは菓子をもらい、縁側^{えんがわ}で一日中遊ぶのだ。ここらあたりのことは、何回か小説のネタにしたことがあるが、菓子商を身内にもったことで、私の味覚のスタートというのは、少し他の人とは違^{ちが}うかもしれない。

京都の商家を模したといわれるその店は、店から裏庭に通じる路地があつた。右側は倉庫、左側は畳敷きの仕事場になっていた。そこで働く祖母の傍にいと、ひょいとカステラの端を切ってくれたりする。そうでなくても、カステラを箱詰めにとすると、切れ端が何本が出る。平べったいそれは、蜜がたっぷりのつていて、私の好物だ。

「割り箸、割り箸」

と祖母が叫ぶのは、水飴をケースから瓶に小分けしている時だ。正直なことをいうと、べたとやたら甘い水飴を、私はあまり好まない。それにせっかちな私はなめるのに飽きて、すぐに噛みつく。齒のうらにべとべとつく水飴を、私はそうおいしいものとは思わなかった。

「べとべと」といえば、食べ物を扱う商売をしているために、夏になると蠅リボンがまるでスダレのようにあちこちに吊るされた。私はよく髪の毛をそれにかからませ、蠅の死骸を頭にのせてはべそをかいた。

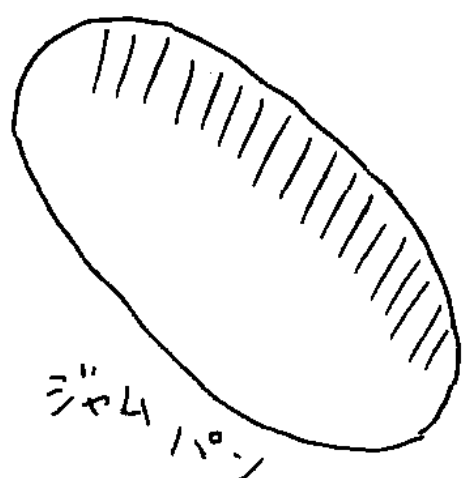
蠅が出る季節だから、あれはやはり夏のことだったろうか。

昼寝からさめると、アンミツが用意されていた。寒天は自分の家で流し、采の目に切る。その上に、ギューヒと、ミカンの缶詰めを少しずつ……。ミカンの缶詰めは、当時とても贅沢なものだったから、ほんの少しずつだ。そのかわり、こつてりと餡をかける。その餡は、残り物のマンジュウを割ってとり出したものだから、丸いかたちのまま固い。

それを崩^{くず}して寒天を一^{いっしょ}緒に食べると、かなり腹ごたえのあるものとなった。
 あ^{ころ}の頃私の食べるものは、こうした「廃品利用^{はいひん}」が、かなり多かったはずだ。
 四角い銀色の缶からビスケットをとり出すと、底の方に粉がたまっている。その茶色のさく
 さくした粉を、メリケン粉にまぜて焼く。

これは「ホットケーキ」とよばれ、私の大好物だった。バターと卵の味がふんわりとして、
 デパートで食べるものよりもずっとおいしいと思った。

私の生まれ育った地方には、「うす焼き」といわれる郷土食があり、これはメリケン粉（小
 麦粉というより、メリケン粉といった方が、ずっと感じが出る）を水で溶^といて焼き、砂糖^{さとう}をま



ぶした、素朴^{そぼく}なおやつだ。

友だちの家へ行くと、よくこれを出してくれた。卵は入れたり、入れなかったりする。文字どおり薄く^{うす}、油で表面がてかてか光っているそれを口にしながら、うちの「ホットケーキ」の方が、ずっとおいしいといつも私は思う。

その「ホットケーキ」より、さらに私が好きなものがあつた。

売れ残りの菓子パンを、朝、祖母^{いそ}が従姉^{いとこ}がとどけてくれる。とどけてくれるといっても、隣^{とな}りなのだから、庭づたいに二十歩も歩けばすむことだ。

防腐剤^{ぼうふざい}や添加物^{てんかぶつ}がいつさい入っていない昔^{むかし}のパンは、すぐに固くなり売り物にならなくなつた。おそらく、大人たちの溜息^{ためいき}をさそつたであろう、売れ残りのパンは、私にとっては大きな喜びだつた。

母は炊^たきあがつたばかりの飯釜^{めしがま}の中に、それをほうり込む。朝食が始まる頃^{ころ}には、菓子パンはちょうどいい加減に蒸らされるのだ。

舌^しがやけどするほど熱い餡^{あん}パンに、ジャムパン。米粒^{みり}がまわりにくっついていてから、それを舌でとりのぞくのはひと苦^く労^{らう}だが、いったん綺麗^{きれい}にした後、注意深く割る。中から、まるで溶岩^{ようがん}のように、餡^{あん}やジャムがとろりと流れ出す。あれは、私が知っている限りの、最高の美味であつた。

母がたんねんに、だしをとった味噌汁みそしるもおいしかった。山盛りやまもりにした白菜、そして生みたての白い卵……。

けれども、私の中で朝食といって思い出すのは、味噌汁やご飯のにおいではなく、ひたすら熱く甘い、餡パンとジャムパンのことなのだ。

やがて私は海苔のりをこっそりポケットにしののばせ家を出る。行くところは三軒先げんの時計屋だ。

「キーヨーミちゃん、オーハーヨ」

二人で手をつないで学校へ向かう。

彼女の上着のポケットにも必ず海苔が入っている。角かどの床屋のへんで、私たちはそれを交換こうかんし合う。

もし、とり替かえるものがあのホカホカ餡パンあんだったら、私は決して彼女と一緒いっしょに学校にいかなかっただろう。

朝の菓子パンかしのことを、私はいちばん大切な親友にもひたすら隠かくしていた。

リョーコちゃんのお誕生日たんじょうび

「マリちゃんちの、お誕生日は、すごかったねえ」

小学校の時の同級生が不意に言った。今年の夏に帰郷した時だ。

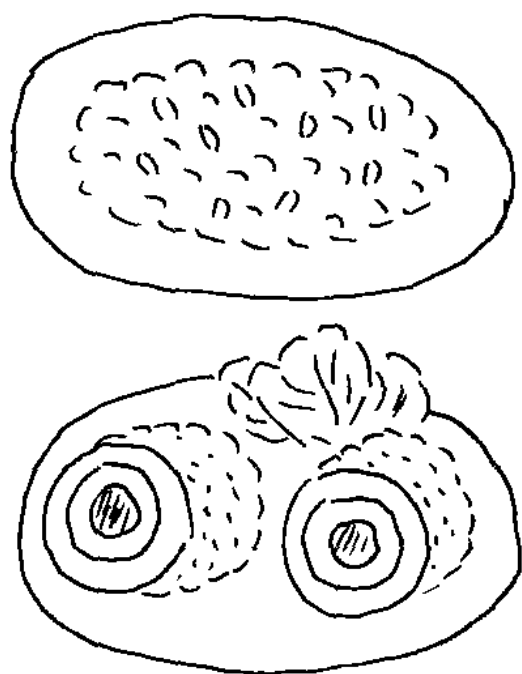
「いろいろ変わったものが出てさ、私、あんなもの、マリちゃんちで初めて食べた」

小さな田舎いなか町で、他のどの子どもよりも富裕ふゆうな少女時代をすごしたという母は、私たち子どもに非常に大きな負い目を持っていた。それは自分が育てられたように、私たちを育てられないという思いだ。確かに家は金持ちとはいえず、いろいろ不都合なことも多かったのだが、ずっと後に高度成長というものがやってくるまで、私は結構自分は恵まれていると信じていた。

友だちの誰だれもかれも、そして日本全体もまだまだ貧しかった。そうした中、のんき者の父親が、自分の趣味しゅみで東京から買ってくるたくさんのおもちゃは、いつも友人たちから羨まうらやましがられたりもした。

それよりも私が得意だったのは、毎年一回行なわれる私の誕生日たんじょうびパーティーだったはずだ。

チキンライスと
バクダンコロッケ



戦前に女専の家政学部を卒業した私の母は、この日のために腕をふるう。
チキンライスに、バクダンコロッケ。このバクダンコロッケというのは、コロッケの中にゆで卵が入り、それを半分に割り、切り口を見せたものだ。その他には、色とりどりのサラダに、フルーツ寒天が、いかにも子どもが喜びそうな配色で大皿に盛られている。
テーブルの上にクロスを敷き、花を飾ったりするものも、よその家ではやらないことだ。
現在ではどうということもない日常のメニューだったろうが、それでも二十年以上前の田舎

の子どもたちの目をむくには十分だったのである。
このお誕生会というのは、あの頃の私たちにとって、非常に重要な行事だった。